

ICT大型捕獲檻や捕獲活動員の設置によるサルの被害防止対策 ー兵庫県篠山市ー

- 兵庫県森林動物研究センター等の協力を得て、サルの群数、個体数、生息状況を把握し、群れごとに対策を検討。頭数の削減、問題個体の捕獲等具体的に目標を設定。捕獲状況を「見える化」することにより地域の意識を醸成。
- また、ICT大型捕獲檻の設置や、サルの生態や捕獲に詳しい捕獲活動員の雇用等により、効率的な捕獲を推進。

篠山市の課題

- 住民からは
「サルは何をやってもダメ…」
「人間よりも頭がいい…」
「もっと捕獲してほしい…」
といった、閉塞感の声…。



《サルが市内を堂々と闊歩、米を食うなどやりたい放題…》



何をしたらよいのか…

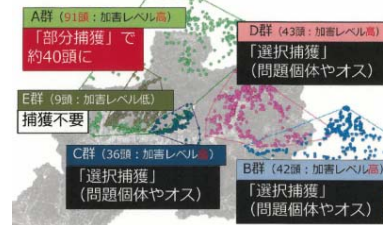
- サルをはじめとする鳥獣被害に悩まされていた篠山市は平成20年に、市、猟友会、JA、自治会長会で「篠山市有害鳥獣対策協議会」を立ち上げ。

- 課題の抽出と地域で取り組む体制作りが課題。具体的には
 - ・ 実態把握と目標設定
 - ・ 有効な対策の検討と導入
 - ・ 対策の継続化
 - ・ 効果の見える化による意識醸成 等

主な対策

- サルの生息状況の把握と目標設定

兵庫県森林動物研究センターの協力により調査と目標設定 (H25当時)



- 箱わなによる捕獲と捕獲活動員の設置
ICT技術の導入やサルに詳しい捕獲活動員の設置により効率的に捕獲

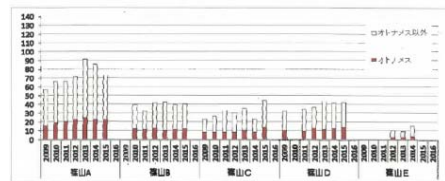


《ICT大型箱罿》

《小型箱罿》

- 捕獲の見える化と共有

群れごとにサルの捕獲数を見る化、ワークショップなどで共有し対策を検討



- サルの位置情報システムの導入

「サル監視員」を設置し、各群れに取り付けた発信機から位置情報を調査して、サルの位置情報を住民にメール連絡



対策の効果

- サルの捕獲数

年度	小型箱罿 (35基)	ICT大型箱罿 (3基)	銃器	計
H25	6	0	0	6
H26	38	10	7	55
H27	27	11	0	38
H28	13	36	0	49

平成26年度にICT大型箱罿、捕獲活動員を設置。設置場所、餌付けの工夫等により**捕獲数向上**。

- サルの群れの変化 (2016年時点)



問題のA群は個体数低減に成功、目標を頭数減から選択捕獲へ。

- 篠山市のサルの農作物被害額の推移

H22年度：約560 (万円) (被害額ピーク)

▲59%

H28年度：約230 (万円)

- サルの位置情報システム利用者の声



どの辺にいるのかを察知でき、追い払いに対処できています。サルが長く居すわらなくなりました。

収穫時期の参考にしていません。近くにきた時は、地区での追い払いや見回りの準備ができ、助かっています。

ICT大型捕獲檻や捕獲活動員の設置によるサルの被害防止対策 —兵庫県篠山市—

◆誰がどのように

市職員が危機感を抱き取り組みを開始。

◆どこで何を勉強してよいかわからない…

支援チームのメンバーである森林動物研究センターに相談。地域活動を牽引するリーダーとともに先進地を視察。

◆粘り強く説明

「サルは頭がいいので何をやってもダメ…」といった閉塞感を持つ人たちに、先進地域の事例等をグラフや写真などを駆使してわかりやすく具体的に粘り強く説明

きっかけ

- ・市内を闊歩、作物は食われ放題、まるでサル天国…
- ・サルは頭がいいので何をやってもダメ…といった閉塞感

Step1 (H20) 協議会と支援チーム設立

- 市、猟友会、JA、自治会長会で協議会を設置
- 協議会の活動をサポートする支援チームも設立(県普及センター、森林動物研究センター等がメンバー)

Step2 (H20~) 先進事例の調査

- 先進事例を学ぶべく、地域ぐるみの活動が成功している三重県等を、地域のリーダーとともに視察
- 先進事例調査に当たっては、県森林動物研究センターに相談

Step3 (H20~) 地域の合意形成

- 市が中心となって、JAや森林動物研究センター等と協力し住民に説明
- グラフや写真などで先進事例の内容をわかりやすく具体的に紹介
- 住民主体で取り組み開始

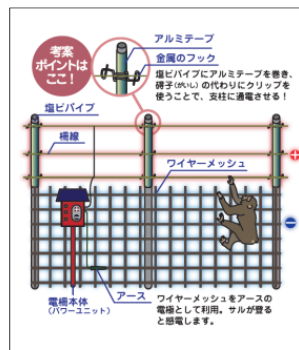
住民主体の活動が始動するも捕獲や被害防止にてこずる…

取組に当たっての秘訣

- ここまでののに10年。被害低減にはそれなりに時間がかかる、焦りは禁物。
- はじめは何をしてよいかわからないので、知見のある人に聴くなど、とにかく情報収集。県、周辺市町村、先進地などとのネットワーク作りが大事。相談できる人、組織の確保も大事。
- 粘り強く対応。地域の合意形成も粘り強く。捕獲や被害軽減対策も粘り強く。
- 小さくてもいいので成果が見えるとモチベーションは向上。
- OPDCAをしっかり回す。対策がうまくいかない時はつまづきのポイントを明らかにしてたたく。

将来に向けて

- 獣害対策や農産物栽培を都市住民に体験してもらうことにより都市住民と連携した新しい獣害対策のモデルづくり。
- 遠隔地から篠山を応援してもらう、米、黒豆、ブルーベリー等のオーナー制度の推進。
- 獣害対策を新たな資源として地域を元気にする。



Step4 (H22~) 新たな技術などの導入

- サル監視員(2名)を設置。テレメトリーによりサル群の動向を把握、2回/日を住民に配信。この情報をもとに地域で効率的に追払い(H22~)
- サルの捕獲に詳しい者を捕獲活動員(1名)として設置。給餌方法、罠の設置場所等を住民に指導するとともに自らも捕獲。(H26~)
- サル用に開発された侵入防止柵「おじろ用心棒」の導入を促進。設置前のみならず設置後の研修も必須として適正な設置と維持管理を推進(H24~)

捕獲数向上、被害も減少

Step6 (H29~) 広域連携サル対策

- 篠山市、丹波市、福知山市、南丹市、京丹波町の県域を越えた市町で広域協議会を結成。(大丹波地域サル対策広域協議会)
- これら市町のほか、兵庫県、京都府の関係機関、大学、NPO法人も参画。
- テレメトリーによるサル群の動向把握を拡大。大丹波サル位置情報システム(サライチ)を導入。

取組を経て…

Step5 効果の「見える化」と共有

- サルの群れごとに個体数、捕獲数、出没頻度の変遷等をグラフにして「見える化」
- 定期的にワークショップを開催し、共有を図りつつ今後の対策を検討。

サルと人との知恵比べ
サル群よりも地域で団結した人の方が勝ることを実感
地域の意識向上、やる気も向上